
太陽の子

ハルメク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

太陽の子

【Nコード】

N1080A

【作者名】

ハルメク

【あらすじ】

浸食される太陽、そして突然現れた1人の少年。「太陽はね、生命エネルギーの源なんだ」太陽と影の世界。僕と坂城は戦わなければならなかった。どちらが浸食されるか、どちらが喰われるか。

序：夕日と少年

あれは陽が空を半分赤にもう半分を紫にしていた時に起こった。僕はその頃小学三年生で、友達と山の開けた場所にある空き地で遊んだ帰り道にその赤と紫の空を見ていた。体が赤と紫に貫かれてゆくのがなんとなく嬉しい。そう感じた。

友達は先に帰ってしまった。

でも僕はさみしくなんかわなくて、陽に照らされて誇らしいと思った。空き地で転けた時にできたキズも陽を浴びて痛みがなくなっていた。太陽は偉大だ、と思う一瞬。

「太陽はね、生命エネルギーの源なんだ」

紫が赤を浸食しはじめたのを僕が気づいたのと同時に、横にいつの間にか男の子が立っていて太陽の沈むのを見ながら僕に言った。

「だから君の傷も癒せる。ほら、」

あったかいと感じる。

膝に手が触れている。

男の子の手だった。手の隙間から光が漏れる。太陽の陽に似ている。

「これでいい」

男の子が手をのけると膝の傷がなくなっていた。治っていた。

「ありがとう」

僕は心から言った。不思議だと思ったけど太陽の力ならなっとくできると思った。

「いいんだよ。でも太陽の力は太陽が出ている時にしか効果はないんだ。力の源はあくまでも太陽自身だからね」

僕はうなづく。

筋が通っていると思う。

そして、太陽はもう空にはなかった。紫が今度は完璧な黒になろうとしている。

あたりまえのように、僕の横にはあの男の子はいなかった。

あたりまえのように消えた。

でも僕はまた会えるような、なんの根拠もない考えがあった。考えというより願いに近い、もっとも薄く弱いものだった。

僕はその薄く弱いものを抱えて、完璧な黒が侵した空間を走った。自分の家を目指して。

これはアニメとか本でよくある始まりまたは序章とかいうものだったのかもしれない。

何か不思議で心踊る冒険とかの選ばれた者だけが入ることの許される秘密の入り口だったんだ。

< 第一話 >

陽は落ちかけている。圧倒的な赤が空を支配している様子が僕の目に見える。

小学三年生の僕から高校二年生になった僕は帰り道に寄った公園で夕陽を見ていた。

この公園は全く手入れがされていないようで、地面からいくつもの雑草が生えている。僕は親の仕事の都合で元いた町から離れた高校に入学した。

僕は初めての引っ越しで慣れ親しんだ町と友達を失った。会えないわけじゃないけど難しい。

メールと電話ぐらいしか友達と会える手段はなかった。

僕は変わってしまった。

元の町にいた時と。

でも元の町に行ったとしたら昔の僕に戻れると思う。
でもここじゃ無理だ。

高校で僕はほとんど人と喋らない。

人を避けてしまう。

なぜかはわからない。

今日の授業中、あの小学三年生の時の出来事を突然思い出したのと同じように。

あの男の子の顔とか容姿はほとんど覚えていない。

でもあの不思議な力は覚えている。僕の傷を治した太陽の力。

陽は落ちかけている。あの日と同じような赤と紫の空になっている。

「こんな感じだったっけ。あの男の子に会ったのは」

そんなことを心の中で言

う。

「そうだね。こんな感じの夕方だったよ、君にあったのは」
僕の後ろで声がした。

心の中で呟いたことに答えるみたいだった。
振り向いた。僕はあの日の男の子を見た。

「久しぶりだね。なんとなく君だとわかったよ。あれは小学校の時
だったかな」

僕もなんとなくわかった。

金髪の男の子、僕と同じぐらいの歳になったあの日の男の子。

<第二話>

「あの時傷を治してくれた男の子だね」

僕はわかった。

あの日の男の子だと、なんとなく。でも聞くのが普通かなと思って聞いた。

「傷？ ああ、そういえば君はあの時、膝に擦り傷があったね。うん、確かに君の傷を治したよ。」

やっぱりだ。

あの時の男の子なんだ。

落陽とともに僕の前に突然現れた男の子。

僕は聞きたいことを全て、一息に聞いてみた。

「なんで君は突然僕の前に現れたのかが不思議なんだあの日から小学生の時から。そして、今もね。あの時どうやって僕の傷を治せたかも」

金髪男の子はあの日と同じ空を、あの日と同じように見ている。少し成長した僕の目は男の子を思慮深い人のように思わせ見せた。男の子の口が動いた。

「僕にはやる事があるんだ。大切なことが。それと君が僕のことを思い出したからかな。これでなぜ僕が君の前に突然現れるかが説明できたね。もう一つの質問だけどそれはあの日に言ったとおりだよ。」

成長した僕はそんな抽象的なことを答えとして待っていたんじゃないくてもっと具体的であの日の出来事と今起こっていること・・・男の子が突然現れたこと・・・の核心を知りたかった。

「ごめん。今言えることはこれくらいしかないんだ。君はもっと具体的な核心を求めてるね。」

また僕の心を読んだかのような言動。顔に書いてしまつのだろうか、僕は。

「これも太陽の力さ。人の心が読めてしまつ。太陽が出ている時だけね。」

謎の男の子なんだ。ああ、やっとわかった。

「僕は不思議な事に巻き込まれてるのかも」

僕は不意に言つた。もう紫が勝っている空だ。

「そうだね。そうかもしれない。まあ折々話すよ君に、全てを。」

僕は紫の空を見ていた。たぶん謎の男の子も空を見ていたと思う。「なんで僕なの」

と言おうと横を向くと、男の子はあの日と同じようにいなくなつていた。突然に。

小学生の頃に出会つた男の子との奇跡的で不思議な再会を果たした僕は、公園から出て春の闇が覆い被さるうとしてゐる勾配の激しい坂を登り、住宅地で一番新しい我が家に帰つた。

僕は夕飯を食べ、風呂に入った。

湯船の温度は丁度よくて、風呂と一体化したような気分になる。

僕の体が気持ちよいと言うように身震いさせた時に、僕は気がついていた。

公園で再会した男の子は僕と同じ高校の制服を着ていた。僕は明日を思つて溜め息をした。

<第三話>

朝。僕は太陽によって起こされる。

二階の僕の部屋は日当たりがよくて、窓ガラスに陽がビームのよ
うにきつく照りつけている。

枕に沈んでいる頭の部分以外の髪がだんだんと熱を帯びてきた。

僕はビームのような陽を手で防御しながら起きあがる。僕のいっ
もの1日の始まりだ。

僕は朝食

を食べて、歯を磨き顔を洗う。洗面台の鏡は膨れた眠そうな僕の顔
を映している。

制服に着替えた僕は時計を見る。

ヤバいと思う。かなり遅刻していた。陽射しが強いわけがわかっ
た。

友達からよくぼんやりしているとと言われるけど、ここまで寝坊し
たりしたことはなかった。

僕は生活面ではきちんとしているほうだ。

親は共働きだから朝早くに家を出てしまう。

だから僕は1人で起き、1人で朝食を作って食べる。結構自立して
ると思う。

僕は家の扉をダイナマイトで爆破させたような勢いで開け、
そしてカバンを振りながら走る。

早く駅に行き、HRが終わった時間帯の学校に着かなくてはと思
った。

そして、力強く地面を蹴る。それを繰り返す。

食べた直後に激しい運動をしたので脇腹が痛くなった。

脇腹を押さえながら駅に到着。人の行き交うのを縫うようにして

改札を通る

学校方面に行く電車に乗った僕は走りながら、脇腹を押さえながら走ってきた道にあった公園を思い出していた。

昨日あの不思議な少年と再会した場所。

あそこの伸びきっていた雑草が綺麗に除草されていたことに気がついた。

学校に着いた。

着いたと言っても学校の敷地内の校門辺りにいるだけでまだ学校に入っていない。

僕はまた走った。脇腹はなんとなく落ち着いていた。

教室は結構騒がしかった。

教室内の時計を見ると一時間目が終わって休み時間になっているようだった。

「珍しいな。浅野が遅れるなんて。ほら、今日お前が日直な」

そう声を掛けてきたのは同じクラスの奥山 正だった。

「寝坊したんだよ。起きたらもうHRが終わってる時間だった。」

カバンを机のフックにかけながら言った。

奥山は学校では言葉を交わすだけの仲だ。こんなのは友達とは言えない。

「そうか。寝坊は誰にでもあるもんな。てか、転校生来たの知ってるか。」

「ああ、知ってるよ。不思議な力を使える金髪の男の子だろ」

と言おうと思っただけやめた。

「へえ。珍しいね。どんな人。」

僕は素知らぬ顔で言った。奥山が教室の奥の席に顎をしゃくる。

「あいつだよ。」

顎の先には本を読んでいる、昨日再会した不思議な少年がいた。

少年は本から顔を上げて、僕の視線を自分の視線と絡める。目が合って少年は微笑んだ。

< 第四話 >;

「お前、坂城にきにいられたんじゃねえの？」

僕の横にいた奥山が言った。ニタついた顔に腹が立つ。
僕は不思議な少年の席に向かって歩いた。少年はまだ僕に笑い掛けている。

「びつくりした？ 昨日の公園の時点で気づいてくれると思ったんだけどなあ」

笑いを崩さずに語る少年。いたずらっ子みたいに幼い笑顔だ。

「なんで君がこの学校に？」

「言っただじゃないか。やる事があるから、ここにいる。そして、そのやる事の内容を君に知ってもらうためだよ。」

真面目な声と、明るい顔で言った少年。

「ちなみに、サカキ サイトが僕の記号。漢字で書くと、」

サカキ サイトは机から取り出したルーズリーフに坂城 西都、と流れるように書いた。

「こうだよ」

「坂城 西都くん、か。記号って？」

「記号だよ。ここで僕を表す記号。」

何か機械的な感じだ。

「僕は、」

「わかってるよ。浅野 真くん、だよな？ これも、」

「太陽の力？」

馴れてしまった。

坂城 西都の会話には。西都は目を大きく開いて笑顔のまま僕の返事を受け取った。

「そう、太陽の力。なんだ、わかってるじゃないか。」

なんたって君のような不思議少年と話しているんだ。それくらいもうわかるさ。僕は心の中で、そう喋った。

雲が空を覆いだした。

影になって、僕の体には太陽の余韻が残る。

西都には僕が今喋ったことを読めないみたいだった。

チャイムが鳴る。影の教室に湿っぽく響いた。

< 第五話 >;

暗く湿った世界になってしまった。そして雨が降っている。

「雨も良いものだね」

僕の横にいる坂城西都が言った。僕たちは一緒に下校している。

「匂いといい、音といい。晴れの日にはないものがあるよ」

傘にあたる雨の音の間から聞こえる坂城の声は澄んでいた。

「坂城は目的があつてここに来たと言つたよね？ その目的って一体なんなの？」

僕は傘で顔上半分が隠れている坂城に聞いた。

口元が決意したように動き、そして開いた。

「僕の目的はね、『影踏み遊び』さ」

よりいっそう雨の音が強くなったような気がした。

僕たちは歩みを緩めず一定速度で傘を手にもち坂を下っている。もうすぐ傾斜0の駅前広場に続く歩道にでるところだった。

僕は『影踏み遊び』について考えた。

二歩歩く僅かな時間に思考する。

『影踏み遊び』は夕方、影ができる時に影を狙い合い、踏まれたほうが負けといった遊びだったような気がする。坂城はそれをしにきたのか？ 誰と？

「影踏み、遊び？ 遊ぶためにわざわざここへ？」

湿っぽさは最盛期になってきた。

吸い込む空気の水分含有量が異常だった。

そして僕は言葉を放ったのだった。坂城は傘をずらして僕を見上げて言った。

「『遊び』ではないけどね。でも、僕は来なければならなかった。『影踏み』をしなければ、」

真摯な表情で言葉を締めくくった坂城。

僕は気になることがたくさんあった。傘に落ちる雨粒よりももっと。

「誰の影を踏むの？　もしくは何の？」

「うん、」

間をおいて坂城が頷く。

「できれば、今から言うことは信じてくれ」

と坂城が言った。僕は頷く。坂城はそれを確認すると小さく頷いた。坂城が口を開く。

「誰とか、何のじゃなくて、踏むのは『影』そのものなんだよ」

<第六話>;

『影』そのものとはなんなんだろう。

「詳しく目的のことを説明するにはまず僕のことを知ってもらわないといけない」

坂城 西都は立ち止まって僕を見る。坂城の顔を幾筋もの雨が通り過ぎる。

「僕は『太陽の子』なんだ。」

坂城のことはわからなくなるばかりだった。

僕たちのほとんどは親から生まれてその人たちの子になる。

坂城は太陽から生まれたのか？ 熱いから無理なんじゃないかな

「僕が君に言うことはどれも荒唐無稽なものばかりだね。でもわかって欲しい。これらは真実だ。『太陽の子』は、まあ言うなれば太陽の精霊みたいなものなんだ。太陽がでている時にのみ活動する国、に住んでいる住民なんだよ」

僕の頭の中は本棚が地震で崩れたかのようにぐちゃぐちゃになった。異世界。

僕は半開きの口を坂城に向けたまま話を聞いた。

「大丈夫かい？ 浅野くん」

「う、うん。大丈夫」

「そして」

と坂城は続ける。

「陰と陽があるように僕たち太陽のものと対になるものがあるんだよ。それが『影』さ」

「影を倒しに来たのか」

僕は思ったまま言った。

「そうでもあるし、そうでもない。倒さなければならぬ『影』を倒しに来たのさ。

太陽の世界があるように影の世界もあるんだ。その間に君たち人間の世界がある。云わば人間世界というのは境界線であり国境なんだよ。太陽世界と影世界のね。その国境を越えようとする影がいるんだ。太陽世界を乗っ取るうとする影さ。その影を僕は倒しにやってきた、まあ国境警備隊みたいなものかな」

「なるほど」

平然と話す坂城に言った。

そして僕たちは再び歩きだした。雨の勢いは萎えて弱々しくなっていた。

前方に見えたのは駅前の商店街入り口だった。

<第七話>

商店街の界隈は小降りの雨で霞んで、濡れている。

どこか、冷やかな雰囲気が漂っている。人通りはまばらだ。傘もささずジーンパンのポケットに手を入れてすたと歩く金髪のお兄さんや、傘をさし杖をつきながら歩いているお婆さんなど、みんな自分の用事に合わせて行動している。

僕といえば、坂城の歩幅に合わせて駅に続いて真っ直ぐに伸びた道路の右側、錆びた色の低い塀で囲ってある路地を歩いている。路地に沿って様々な店が並んでいる。

低料金散髪屋、古本屋、レンタルビデオ屋、どの店も自分を主張するようにネオンを輝かせている。

どんより暗い雰囲気の漂っている駅前にはネオンの光で居たたまれない場所のように見える。

「まるで都会の歓楽街に訪れたような気分だね」

僕たちがちょうど一番光を出しているレンタルビデオ屋を通り過ぎた時に坂城が言った。僕たちのいる此处。

つまりこの市はあまり都会じゃない。

地方都市とはまだ呼べないかもしれない。

だが、この駅前のネオン煌めかせる店が立ち並ぶ辺り一帯はテレビでよく見る東京の歓楽街を想起させた。

「天候が天候だからね。そう思うのも無理はないよ。それにどの店も駅に集まる人を呼び込みたいだろうし、目立つ手段は厭わないんだよ」

「それは大変だね。でもなぜか僕には疲れてしまっよ。そういうのは」

坂城は上半身を曲げて後ろを振り返りネオン煌めかせる店を見ながら言った。

「本当にまったく」

坂城の生き方に少し親近感を覚えた。

「そうだね」

そんな会話をしているうちに坂城は目的地に向かう確実な歩幅になった。

僕もそれに合わせる。

坂城が向かおうとしているのは店と店の間にある人が横に3人並んで通れる程の道だと分かった。

「ここだ」

坂城は道の入り口で立ち止まって言った。

道は淡い闇に続いていた。

ネオンの光が入ってくることもない。

なぜ坂城がこの道を探していたのかは分からない。ただ僕は坂城についてきた。

「この道がなんなの？」

僕はそう聞いた。

僕たちはとつくに傘をさすのを辞めていた。弱い雨の線が坂城の横顔を突っ切っている。

坂城は僕のほうに顔を向けて言った。
「ここに影がいる」

<第八話>;

「影がいる」

坂城はそう言った。目線は暗闇の裏路地に向けている。

僕は坂城に任せるままにここまで来てしまった。

好奇心と探求心が交互に僕を動かしたのだ。

ネオンの艶やかな光が僕たちを照らし、小雨が打つ。

「影って何なの？ 『影がいる』って、それじゃあ」

「うん。僕が言う影は、光が生物の下敷きになように創り出す哀れな分身ではなく、『個としての影』なんだ」

目線は路地に向けたまま坂城が言った。

「僕はそれを消すために来たんだ。これが君の知りたいこと占有率の大部分の答えかな？」

僕は頷いた。これはいよいよ巻き込まれたな、と思った。

「君には悪いけど、この路地にいる影を消すところを見物してもらうよ。後々君にも役にたつからね」

二回頷きながら坂城が言った。

僕の役にたつ？ 将来は会社勤めに身をやつす覚悟の僕にそれは役にたつのかな、と思った。

「じゃあ、行こうか」

坂城が歩きだした。

僕もつられて歩きだす。

ビルとビルの間、の袋小路は雨と空を覆っている雲で陰気に湿っていた。

20メートル程行くと高い壁が行く手を遮った。

渦をまく湿気が僕の肺まで流れてきた。

「出力するエネルギーは晴れの間に充填しておいたから、安心だ。問題は影の濃さとタイプかな」

坂城が囁くように言った。

汗が鼻筋に浮いてきた。僕は何が起ころうとしているのか何となくわかった。坂城は

「個としての影」

を消す、戦うのだろう。

そんな戦いを自分は見学できるのだろうか？ 僕は戦闘能力のない一介の高校生。

影が凶暴なものだったら自分はもしかしたら、

『こーん、こん』

僕たちの背後からそれが聞こえた。そんなに離れていない。

顔を左に向けて坂城を見る。

坂城はすでに音のほうを向いていた。僕もそちらを向く。

『こーん、こん、こん』

僕は音がしたほうを向いた。

確かに前のほうからそれは聞こえた。

しかし僕の視界にあるのは路地の暗闇が凝縮したような球形のものだった。

いや、これなのかな。

坂城が言った影とは。人が一抱えできそうな大きさの暗闇の塊はまた鳴いた。

『こん、こーん』

「浅野くん、下がっていきな。多少危険だから」

坂城が左手で僕を後ろへと促す。

言われるとおり後ろへ5歩退いた。

「さて、と」

坂城は僕が下がったのを確認すると、暗闇の塊と対峙した。

「そんなに濃くはないな。現存のエネルギーで充分に消すことは可能」

『ゴオオ、ゴオオ、ゴオオン！』

塊が蠢きだした。

何かの形状に変わろうとしているかのように球形から突起がでたり、窪んだりしている。

「タイプは四足動物か」

球形だった塊は犬のような型を形

成した。暗黒の色をした犬だった。

暗黒色の犬は吠えた。

『ゴオオン！』

ゴオオン！』

今起こっていることについて、僕が認識できるのは悪い犬型影と太陽の力を操る坂城が対峙しているということだけ。これから自分はどうなるのだろうとか、あの黒い物体が現れた仕組みだとかは考えられず、ただ暗い路地裏での対決を呆然と眺めることしかできない。

「すっかり侵されているね。・・・じゃあすつきりとキミを消してあげるよ」

坂城は掌を影の犬に向けた。

犬はそれに反応して身構えた。唸り声をあげる。

その時、薄暗いはずの雲のせいで暗鬱とした路地裏に光が生じた。それは坂城の掌から発せられる光。坂城曰く太陽の力。

『ガアアアアア！』

影の犬が跳躍した。黒い塊が坂城に襲いかかる。しかし、坂城は避けようとしなかった。光を放つ掌を犬に向けたまま構えを崩さない。

僕はただ見ているしかなかった。一介の高校生男子が勇気を捏造して立ち向かって良い物ではないと分かったからだ。分かっただけマシだと思った。

「さよなら、」

白い閃光が視界を包む。音はない、感覚もない。ただ白いだけ。急に視界が暗転。しかしそれは元の薄暗い路地裏が視認されたというだけ。幾ばくかの白い閃光の余韻を残しながら僕の眼は順応していく。

坂城は立っていた。背中しか見えないので表情は分からない。し

かし背中から疲労困憊な様子が見て取れた。

影の犬は、消失していた。もしくは蒸発した。影も形も見えなかった。

「やはり、自分の身体からエネルギーを出すというのは疲れるよ。困憊しきつたね」

坂城が振り向いて言った。

顔には隈が出来ていた。坂城の白い肌には似つかわしくない。

「さてまあ、君も見ただろうけどさっきのが影だよ。全ての影がああなるわけではけれど」

「ずいぶんと凶暴なんだね」

僕はやっと口を開けた。なんとか口ごもらずに言葉を紡げた。

「ああ。だから僕たちが影を消す。さっきのようにね」

影は太陽世界を脅かそうとする存在。だから坂城たち『太陽の子』は影を消す。それはもう既知だ。

「しかも、」

坂城は続ける。

「人間が襲われることもあるしね」

<t;第10話>

「いやあ、疲れたね。1日一回が限度だよ。まあ僕が未熟者だからだけだ」

坂城 西都は餃子を箸でつつきながら言った。
僕の前にもチャーシュー麺の丼が置かれている。

『雷麵軒』は駅前にある中華そばの店であり、僕たち2人はあの影の犬との戦いが終結してから使い果たした体力（坂城のエネルギー）を回復させるために中華そばを食べに来たのだった。

「人間を襲うって、それは喰われるってことなの？ あの影の犬に」

坂城は箸を両手に持ち、カニのように餃子をかき込んでいる。

「むー、喰われると言うのも正しいね。でもこの世界でいう喰われるとはちよつと違うんだ」

坂城はコップに入った水を飲み干した。店内には様々な人が料理を食べていたけどこんなに目立つ人は坂城以外はいない。金髪というか白に近い色をしている髪の毛は地毛なのだろうか。

「影の素をね、生物に注入しちゃうんだよ。」坂城はコップを置いて言った。

「影の素を注入された生物は生物ではなく生物だったことをも忘れて、ただ無差別に他の生物を襲うようになるんだ」

コップにキャッチャーで水を入れる坂城。僕は坂城が発した言葉

に少し緊迫し、恐れた。

「そうになると、影はどんどん増殖し、影世界と太陽世界の均衡は崩れ、君たちの世界にも影響が出てしまう。・・・あの犬くんも影の元を注入されたんだよ。もう結構広がっているみたいだ」

坂城はコップをワイングラスにするように揺らしている。氷がぶつかる音がする。

こんな非日常なことに巻き込まれた僕とは対照的な店内に、何処か疎外されているような、僕と坂城だけ別空間で会話しているような感覚がした。

「坂城、くん。僕には何もできないよ。僕はただの高校生なんだ。何故僕を、何で僕にこんなことを教えたの？」

「・・・」

坂城は僕の目を見た。 「真くんは知らないんだよ。君自身の力を」

第11話（前書き）

目眩がする。

第11話

啞然とした。

坂城の言った言葉に。

「君には特別なものが備わっているんだよ。あの時からね」

よく見ると坂城の頬には小さな何かが付いていた。たぶん餃子の具だろう。幾ばくか集中力を削がれた。

「あの時って？」

「僕たちが出会った時だよ」

坂城は滔々と語りだした。

「僕の若気の至りだったんだよ。そのせいで君を今回の戦争に巻き込んでしまった」

「――戦争？」

「君に出会った時、僕は君の傷を治した。しかしそれがいけなかった」

「――なぜ？」

「君の体には『影の素』に対する抗体が出来てしまった。故に、君は唯一、影に浸食されない存在だということだ」

「――それは良いことなのか？」

「太陽世界最高学閥『日輪研究機関SOA』の観測結果でそれが解った。SOAは僕との接触からずっと君を監視していたんだ。

そして僕の所属する『太陽世界防衛機関SOS』であることが決定された」

――あること？

「浅野真と共に『影』と戦う。浅野真には『盾』になってもらう。我々、『太陽の子』が『影』に浸食されないための。そして浅野真を太陽世界へと連行し、『抗体』を作るための実験に協力してもらう。――SOSが決めたことだよ」

目眩がした。

それは、横暴だ。

「それは、横暴だ」

僕は思ったままを口にした。普段、そんなことはなかった。僕の意志を無視して、それに、『盾』になれと言うのか。

「ごめんよ、浅野くん。僕のせいだ」

でも、と坂城は言った。

「君にしか、頼めない」

第11話（後書き）

小説家に、なりたい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1080a/>

太陽の子

2010年10月10日02時07分発行